再発見　ラグビーは生きている

「ラグビーは生きている」という表現は、楕円形のボールがどちらに転ぶか分からないという予測困難性や、ゲーム展開の予測困難性を指して言う場合があり、時にはフォーメーションの自由性や、Advantage Law の適用に係わる裁量幅や自由性と予測困難性を合わせて独自性を指す場合がありますが、それらはどのスポーツにも大かれ少なかれ言えるものです。ラグビーの場合は、それらに常に着実な生成進化を遂げているスポーツであるということ指しています。200 年にわたりラグビーを育て愛してきた多くの人達の愛情と誇りをこめた言葉です。それを不変の過去の遺物のように考えて対してはいけないということ、無機質の物ではなく、有機質物体として考え楽しむことを教えています。時勢に取り残された伝統や片寄った固定観念に左右されることなく、常に根本理念に照らして研究を怠ることなく、生き物をより良く生かし将来へ引き継ぐということを決意し、ラグビーのより良き未来を志向することの大切なことを示している言葉です。改めて生き物と言われる要件を分析し、いかによい形に生き長らえさせるかについて考えたいと思います。

［生き物誕生そして普及］

ラグビーの誕生は 19 世紀に逆上ります。産業革命に活気づくイギリス社会のエネルギーが、フットボールでのラグビー校の象徴的な出来事によるものだと言われています。若者のあふれる生気と熱情が本能を揺り動かして誕生しました。反則行為をも肯定的に取り入れた積極性はすばらしい勢いで普及にもみられました。活動中の問題はすべて紳士的に話し合われてケースローとなり、一つのフットボールが誕生しました。そして gentleman ship や sportsman ship を象徴するかのように広く愛され親しまれました。

目覚ましく普及していく中で、ケースローだけでは追い着かなくなり、1866 年にルールの整理がなされました。整理の元になったのはラグビースクールで行われていたフットボールの規則でした。整理された条文の始めに「ラグビースクールで行われているフットボールの規則では・・・」と記されています。ルールが整理され、プレーヤーの画期的増加とチーム数の増加はチーム同士の連携が必要となり、統合体の設立が必要となりました。協力協同体統合組織として 1871 年 RFU（ラグビー協会）がトゥイッケナムに設立されました。そしてイングランドから Great Britain 諸国や植民地へ、そしてヨーロッパから世界中へと普及し、グローバルスポーツとして、RFU 中心の古き良き時代から今日の IRB 統括の時代をむかえているのです。誕生以来 200 年近く、その根本理念は、脈々としてうけつがれ競技に生かされています。

［生き物ラグビーを生成発展］

生き物ラグビーは長い間多くの関係者の努力によってすばらしいアイデンテイテイを維持しつつ生き続けてきました。ラグビーは常に生き物として研究がなされていることによって生きつづけています。今日までの画期的なものをとりあげてみましょう。

1866 年申し合わせやケースローの大整理が行われました。
1960~70 年代にそれまでの研究派なせいの上にたって改革が着手されました。
1970 年 RFU 設立 100 周年の祝賀会に全世界が集まって改革の議論がなされました。
1960 年代に始まったラグビー温故知新の活動は歴史や規則の研究が進められ、新しい方向性が打ち出され、皿なる普及に努めグローバル化の一路をたどっています。
1960~70 年代はコーチング先行の時代といわれるように、コーチングに重点がおかれた聖典といわれる The Guide for Coaches の出版をはじめとして基本教科書 Better Rugby が作成され、手引きとして数種のハンドブックが出版されました。中でもレフリングに関する The Art of Refereeing はレフリーの権威を保つ物として重要視されました。

ゲームを左右する power と flair に考察が加えられ、power の要素の偏重視から flair 重視への方向性が示されました。しかしゲームは power 重視と固定化に進みましたそこでラグビー界最初のプロ（Technical Administrator）としい Don Rutherford が任命されました。そして「ラグビーは running handling game」であるという認識を高め、用語も整理されました。スクラムの押しは、push ~ shove というように表現転換から力の要素を抜きだし、ルーススクラムという用語を廃してラックとし、雑然とした組打ち合いの中の heel out を leave という表現を使うボールの取り合いにまとめました。しかし残念ながら 1870 年以降も改革の方向性はかわりないのですが、理論が十分理解吸収されずプレーの現実は相当かけはなれたものになって今日に及んでいます。

ボールを確保するために地上に横たわっているプレーヤーの上に横たわる行為が減少するどころか反対に多くなり、正当化されるようになってしまっています。

2000 年 21 世紀を迎えるに当たってミレニアム改定から競技を simpler で easier にすることによって方向性の一貫性がはかられましたがなかなか成果が上がりませんでした。歴史研究から理念を認識し、言語化をすすめることも努力されています。ラグビー協会などのラボラトリーで歴史や記録の研究進められ、ラグビー憲章を文字化してルールブックに入れ、毎年ルールの改定につとめられています。レフリーの権威確立にも留意されています。ラグビー界全体の運営は RFU 中心から IRB になりましたが、各国協会の連係も進み、理念の認識と徹底がはかられています。プレーヤーだけでなく、レフリーと観衆も一緒になってよいゲーム作り出すムードもできてきました。プロ化も進み、W 杯も盛況の一途をたどっています。

ラグビーは机上でつくられたスポーツではない、と同時に、「プレーが先」ということが生きていると言われる理由の一つにあげられます。プレーヤー達が力一杯戦う中でいろいろな問題が発生します。また咄嗟の発想もおこります。それを取り上げ議論して新しい規則を作りだすのです。つねにプレーが先ですから、常に話し合われているわけです。話合はケースにごとに議論し、理念やアイデンテイテイとの整合性が考えられます。ルールが志向するものを具現化することが話合われます。改定結果より改定過程が重大事なのです。ルールの改定については、シーズン始めに今年の改正の骨子だけを聞いてそれに対応を考えるという方法は差誤を生ずることがあります。改定については話し合いの過程が大事で言葉に含まれる精神が問題なのです。改定の道筋をプレーヤーも指導者もレフリーも真剣に学習しなくてはなりません。プレー中に問題点（問題意識）が問題提起となり議論され改定へと続くのです。対英語問題があります。日英対比研究も大事です。和訳については直訳でなく「精神訳」（精神を生かす）が求められるのです。プレーヤー対策の一つとして、全てのチームが一年に一日ルール研究の日を持つことが習慣になることです。ルールブックを見たことがない、もちろん読んだことがないプレーヤー多いという現状は改革しなければなりません。生気の乏しい栄養不良のラグビーの放置はいけません。勝利至上主義に走り、何をしてもただ勝てば良いといった態度でプレーすることはいけないということを自覚しない人は、ラグビーを楽しむ資格がないということにつながるのです。

［生き物ラグビーのよりよい未来］

ラグビーは、equal condition のもとに、open play を継続し、常に安全であることを保持することが基盤であるという共通認識と、ラグビーは running handling game であって、running handling の場面が多い程面白いという共通認識のもとに、戦い、問題点が発生すれば先の共通認識をもとに話しあって解決していくわけですが、より楽しむためにそれらを踏まえてラグビーを simpler に easier にする努力もなされています。また憲章にあるように、勇気、忠実心、スポーツマンシップ、規律、チームワークを体得と発揮して自律し高揚につとめるという目標も掲げられています。生き物ラグビーをどのように生かして楽しむかは人間にかかっています。そこには自制の知恵と知性が欠かせません。歴史やルールについての勉強をする機会が絶対に必要です。プレーヤーの自制は本人に求めるだけでは十分ではありません。自制の欠如をプレーヤー本人の責任だけとせず、平素の人間教育が必要です。そのための人と組織が渇望されています。例えば、反則による一時退場の規定は、反則に対する感覚の鈍化を認めるものとして否定論がありましたがが、試合中に一チームが 10 以上の反則をし、そけに対するペナルティキックが行われるというのは不注意の結果であってはならない異常な状況で、指導者にも問いかけられているのです。

世間を騒がせた相撲の朝青龍の問題で言うならば、起こった結果の現象だけを見て批判し判断することは間違いで問題解決になりません。生き物の進化発展については常に新生な栄養をあたえねばなりません。ただ勝敗を争っているだけでは発展のエネルギー不足で、ラグビーは衰退の一途を辿らざるを得ないのです。

2010.03.13
西川　義行